発達のなかの煌（きら）めき

第Ⅰ部　障害のある子ども・なかまの発達

白石正久　白石恵理子

しらいし　まさひさ／1957年、群馬県生まれ。小児科病院の発達相談員などを経て、現在龍谷大学名誉教授。

しらいし　えりこ／1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。

第1回　生きる・つながる・発達する

私たちは、障害のある人たちの発達の研究とともに、乳幼児期から成人期までの実践を担う教師や支援者の養成に携わっています。卒業後の彼らが語る実践の喜びや苦しみには、二人でいっしょに耳を傾けてきました。ある卒業生から手紙が届きました。

先生方、二年ぶりにお便りします

お会いしたいと思いつつ叶わないままになってしまいました。『みんなのねがい』の連載が始まると聞き、同期の仲間でいっしょに読みあいたいと話しています。

私が特別支援学校の教師になって、一〇年余が経ちました。最初の担任は中学部のクラスでした。そのときの生徒の一人のリョウちゃんに、先日、近所のスーパーマーケットの駐車場で出会ったのです。今、二五歳の彼は、お母さんよりもずっと背が高く、すてきな青年になっていました。作業所で働いています。お母さんは、「車の色を見たら、先生だって、すぐにわかるわ」と言われました。家庭訪問のときの私の車の色を憶えてくれていたのですね。

卒業後にリョウちゃんと出会ったのは初めてで嬉しかったのですが、私は家に帰ってから涙が止まりませんでした。先生、なぜだかわかりますか。

教師として働き始めてから数年は、本当に苦しかったです。自分の知識と実践力が不足しているからだとわかっていたのですが。二年生だったリョウちゃんは、いつも機嫌よく登校してくるのですが、「朝の会」がはじまる前に毎日のようにトラブルを起こしました。なにがきっかけか、突然に友だちの言動にいらだち、「ぼけ、死ね」と叫び続けるのです。椅子を蹴り上げることもありました。私はなにより、そういった言葉遣いを受け入れられませんでした。発表会や他校との交流会の練習が始まると、教室に居つかず不安定さも強くなりました。これが思春期かと思いました。

お母さんは数年前に離婚し、三人の子どもを一人で育てていました。家庭訪問のときのことは、はっきり憶えています。アパートの部屋はきれいに片づけられていましたが、子ども三人のいる家庭にしてはモノが少ない室内でした。そのとき聞いたのですが、お母さんは子どもたちを学校に送り出してから、介護の仕事に出かけています。そしてリョウちゃんを迎えてから子どもたちが寝つくまでに家事を済ますと、夜半過ぎまで近所のコンビニで働いているというのです。「妹、弟も、希望すれば大学まで出してやらなければと思っています。頼れる親戚もいないし」と言われました。そのお母さんそっくりの妹さんは今春、大学を卒業して障害のある人の生活介護の施設で働くとのことです。

「発達の節」を乗り越えるとは

リョウちゃんは、ちょうど「四歳の節」だと小学部からの引継ぎにありました。母の日などの特別なときには、ひらがなを選んで思いのこもった手紙を書こうとしましたし、「大きい―小さい」「重い―軽い」などの対比的な概念の理解もたしかでした。クッキングのときには両手で慎重に卵を割る姿がありました。そのときの手先を見つめる彼のまなざしに、教師は「四歳の節」を乗り越えているという実感をもつことができたのです。だから、衝動的ともいえる行動の意味が理解できませんでした。

先生には、「発達の節」では発達の道を行ったり戻ったり、横道に逸れることを繰り返し、心に力を蓄えてから乗り越えていくのだと教えていただきました。「四歳の節」では「大きい自分」としての誇りをもちはじめ、状況や他者の要求を受けとめながら、「…だけれども…する」と寂しさや悔しさをこらえて、よりよい自分を選び取ろうとすること。でも、思い通りにはならない自分の現実もあり、そんなとき「赤ちゃん返り」したり、ときに大荒れすることもあること。そういった知識と目の前のリョウちゃんの姿は、私のなかではつながりませんでした。発達を学んだことが私のなかで根を下ろすには、まだまだ時間がかかりそうですし、そうなるために大切なことを、今更ながら教えていただきたいのです。

そのリョウちゃんが、三年生になってたしかに変わったのです。そのころ、私の彼への見方も変わりました。どっちが先だったかは、わかりません。転機になったのは中学部の重症児のクラスとの交流でした。医療的ケアが必要な子どもたちに、そっと近寄り微笑みかけたときの柔らかい表情、教師に促されて手に優しくふれた姿。そこに本当の彼がいると思えたのです。日々いろいろあっても、きょうだいにも同じような心で向きあって彼は暮らしていたのでしょう。きっと、